

コラム

# 100年前に戻ってみたい



杜 海樹

筆者の父の死去を切っ掛けに、父方の祖母の出身が東京都文京区小石川久堅だと分かったことから、戦前の戸籍を頼りに当時の住所を尋ね歩いてみた。すると驚きの発見がいくつかあった。

まず、石川啄木の最期の地が小石川の久堅だとは知っていたので、啄木最期の地を尋ねてみた。すると、現在そこには歌碑と記念館（顕彰室）が建てられており、ちょっとした観光名所となっていた。石川啄木が久堅ですごしたのは1911年（明治44年）から僅か8ヶ月ほどだったようなのだが、祖父母宅跡から200メートルの距離しかないことがわかったので、おそらく祖父母が子ども時代に顔を合わせていた可能性は高いと確信できた。

次に、石川啄木最期の地を離れ、東京大学のある小石川植物園側から吹上坂という傾斜の緩い坂道を上ったところに祖父母の家があったと思われたので、明治時代の地図と番地を頼りにその場所に向かってみた。すると、祖父母の家があったと思われる地点には、小石川の名水「極楽水」があり、隣には將軍徳川家康の側室であり松平忠輝の母でもある茶阿局（ちゃあおのつばね）の居所「宗慶寺」があり、真向かいには善仁寺の境内があるという立地であった。この付近は、江戸時代には松平播磨守の屋敷もあったとされていることから、祖父母は徳川家と何らかの関係があっ

た可能性が高いと判断でき驚いた。茶阿局の子である松平忠輝は、幼少の折、下野（栃木）栃木には筆者の父方の名字と同様の片柳町が存在している）に預けられていたという記録も残っていたので、側付き等として先祖が江戸入りした可能性もあると思った。ただ、残念ながら居所跡や詳細等は、おそらく関東大震災や第2次世界大戦等で全て消え去ってしまったものと思われ、確かめようがないのだが、状況証拠を固めていくと、やはり徳川家に仕えていた可能性は高いと推測でき、人の繋がりや物事は足を運んで見ないとわからないものだと思つづく思つた。

さて、これは今から100年ほど前の筆者に関する個別の話であつたわけだが、今から100年前の日本及び世界はどうだったのだろうか？ そう思つて目を転じてみると、当時の地球上は第一次世界大戦の真っ只中であつた。1915年の7月にはハイチがアメリカに占領されるなどの事態にもなつていた。また、日本では足尾銅山の鉱毒が大問題となり足尾銅山の近隣では深刻な被害が続いていた時でもあつた。そんな足尾銅山跡地周辺が現在どうなっているか……？ やはり現地に行つてみたくなり足尾にも足を踏み入れてみた。

その足尾の山々だが、筆者が中学生時代に一度登山しており、亜硫酸ガスの影響等々で人が住めなくなり廃村となつた松木村を擁す

## 東京都指定旧跡 石川啄木終焉の地

所在地 文京区小石川五丁目一丁目七番七号  
指 定 昭 和 二 七 年 一 一 月 三 日

石川啄木は明治一九年（一八八六）二月二〇日（または一八年一〇月二七日）、岩手県南岩手郡日戸村（現 盛岡市玉山区日戸）の常光寺で生まれた。本名を二とす。

盛岡中学校入学後、「明星」を愛読し、文学を志した。生活のため、故郷で小学校代用教員となり、のち北海道に渡り地方新聞社の記者となったが、作家を志望して上京、朝日新聞社に勤務しながら創作活動を行った。歌集「一握の砂」、悲しき玩具、詩集「あこがれ」・「呼子と口笛」、評論「時代閉塞の現状」などを著した。

啄木は、明治四四年（一九一一）八月七日、本郷弓町の喜之床（現 文京区本郷二丁目三八）の二階からこの地の借家（当時の小石川区久堅町七四番四六号）に移り、翌年病没するまで居住した。

この地に移った啄木は、既に病魔に侵されていた。明治四五年四月二三日午前九時三〇分、父一淑、妻節子、友人の若山秋水に看取られながら、結核により二六歳の若くして亡くなった。法名は啄木居士。

文化財を大切にしましょう

平成二〇年十二月 設置  
東京都教育委員会

▲ 石川啄木終焉の地

## 茶阿局墓碑 (小石川4-15-17)

この墓碑は、元和7年(1621)の年紀をもつ古い宝篋印塔である。太平洋戦争により、宗慶寺は大きな被害を受けたが、当寺と檀信徒の絶大な協力で、この墓碑は、旧貌を今に残している。紫の紋が鮮やかである。

茶阿局は、駿河(現静岡県)の人で、徳川家康の側室として、家康の第六男忠輝(松平)の生母となった。家康の没後、髪をおろして朝覚院と称し、飛騨高山に流亡中の忠輝を案じながら、元和7年6月12日、没した。

法名「朝覚院殿貞宗慶大禅定尼」にちなんで、寺は宗慶寺と称するようになった。この寺の創建は古く、応永22年(1415)と伝えられ、家康の生母伝通院(於夫の方)の墓所のある伝通院とゆかりの深い寺である。

浄土宗 吉木山朝覚院宗慶寺

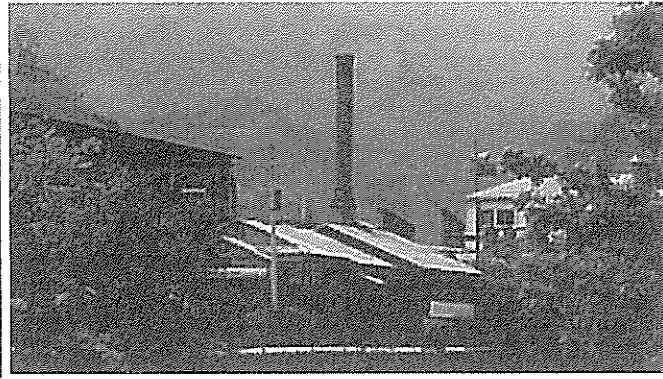
郷土愛をはくくむ 文化財

東京都文京区教育委員会 昭和63年3月

▲ 茶阿局墓碑



▲ 草木が根付かない足尾の山々



▲ 本山精錬所跡

70年間は草木が生えないと言われた広島や長崎でも草木が生い茂り人々が暮らしているというのに、足尾の山には未だに草木が生えない地区が残されている。廃村になった村に住んでいた人々の生活がどんなものであったか、その様子が語られることもない。福島原発事故から4年が過ぎたが今日、足尾の松木溪谷に足を運んでみるのも良い

る松木溪谷を歩いた覚えがあったが、それ以来実に40年ぶりの訪問であった。40年ぶりの松木地区ではあったが、しかし、山々の光景は当時とほとんど変化はなく、植林がされているにもかかわらず、山々には草木がまだまだ戻っておらず、荒れた茶褐色の岩が露出していた。松木地区から緑が消失しはじめたのは1880年代頃からであったと思われ、緑が消失しはじめてから実に140年余りが経過している。100年過ぎても草木の生えない瓦礫の山がこの日本にあり続けているという現実をどう受け止めたらよいのであろうか？ そんなことを思い浮かべながら、暫し足尾の山々を眺めていた。

原爆が投下された後に



▲ 整備されている銅山坑内



▲ 足尾銅山労働組合

のではないだろうかと思うことしきりであった。最後に、かつての筆者の祖父母の家の近隣には東京帝国大学もあったわけだが、その帝大で足尾鉍毒事件を住民・農民の立場から科学的に調査したのは、後の東京帝大の古在由直総長（1920年～1928年）であった。東京帝大のあった場所も祖父母の家からは徒歩圏内であったので、古在総長ともすれ違っていたかもしれない……？ と思うと、100年前に戻って話を是非とも伺って見たいと思った。